地域と企業、共に果たす社会責任

Community and Enterprise: Socially Responsible Activities in Cooperation

川　島　優　佳*
Yuka KAWASHIMA

１．茅ヶ崎市とアルバック

アルバックは、1952年（昭和27年）８月に、松下幸之助・藤山愛一郎をはじめとする６名の著名な財界人の出資により「日本真技術株式会社」として設立したベンチャー企業です。当初の事業は、世界的に著名な米国・真空機器メーカーNRC社からの輸入販売が主体でした。その後、真空機器の国産化を目指し1955年に大森工場（東京都大田区）を開設。さらに1956年、関西の真空メーカーであった株式会社東洋精機真空研究所と合併し、尼崎工場を開設しました。これによりアルバックは、真空治金装置、真空化学装置、真空ポンプ、計器など真空総合メーカーとして新たなスタートを切ることとなりました。

日本の高度経済成長時代（1960年頃）にあわせ、アルバックはより生産を拡大するべく1959年に横浜工場（横浜市南区）に本社・工場を移転しました。さらに取り扱う真空機器の高度化かつ多様化に応えるため、当社の発起人の一人であった藤山愛一郎とかかわりのあった大日本製糖が所有していた茅ヶ崎市内の用地に1968年、茅ヶ崎市内に本社・工場を移転し現在に至っています。

今では、アルバックグループは、売上高2,320億円、連結従業員数7,878名、国内外を含め約60社となるまでに成長しました（2011年６月30日現在）。特に、本社・工場を置く茅ヶ崎は、アルバックの独創的な先端技術を発信していくための重要な拠点となっています。アルバックは、企業と地域のコミュニケーションがこれまで以上に様々な社会問題を解決していくためにも重要な役割を果たしていくと考えています。

２．アルバックグループの社会貢献活動

アルバックグループでは、「独創的な先端技術を持って産業と科学の発展に貢献する」という経営理念の下、独創的な技術を世界中に提供するとともに、アルバックが保有する技術や人材を活かし、社会のさまざまな課題を解決するための活動を行っていきたいと考えています。特に、アルバックを中心に国内グループをはじめとして、海外グループ会社でも地域に根差した活動を推進しています。ユニークな海外グループの取り組みとしては、韓国アルバックが実施した伝統のキムチづくりを通じた社会貢献活動があります。韓国では、冬が始まる前に翌年の春（３月）までに食べるキムチを多量に作る文化があります。このキムチをキムジャンキムチといいます。この伝統的なキムチを作るためには多くの人手や材料が必要となるため、社員が福祉協会と共同して作り、一人暮らしのお年寄りや身寄りのない子どもたちに提供したということもあります。

このようにアルバックグループでは、グローバルに企業活動を行う中で、各地域の習慣や文化にあ

＊株式会社アルバック 経営企画室 広報・IR室 CSR担当

わせた社会貢献活動を推進しています。

３．茅ヶ崎市内でのアルバックの取り組み

３－１．田んぼプロジェクトの目的

田んぼプロジェクトは、環境・エネルギーや資源材料分野を牽引する企業として、ステークホルダーから環境保全活動だけでなく社会貢献活動に対する取り組みが期待されているという社会的要因と、CSR活動の一貫として、地域（茅ヶ崎）の農業・環境問題を自らの問題と捉えるともに、社会貢献活動の場、従業員・家族・地域とのコミュニケーションの場を提供することを目的に2009年に活動を開始しました。

活動を具体的に検討し始めると、活動場所やインフラ（トイレ、水道、駐車スペースなど)、農作業の指導者を探すなど様々な問題があり、活動を開始するまでに準備を含め2年ほどかかりました。その中で、茅ヶ崎市経済部農業水産課の方へ相談させていただいたところ、農家の方の紹介や活動を行う上での情報提供にご協力いただき、活動を開始することができました。このように、地域に密着した活動を実施する場合、行政や地域の方々のご理解がとても重要であることがわかりました。また、社内においては、活動そのものが様々な側面があることから部門を超えて協力を得て、下記のいつくかの点に留意し継続的に活動を実施することを念頭に協力体制を構築しています。

① 人材育成

アルバックは、製造装置を生産しているメーカーです。一人では製品を作り上げることはできません。そのため、行動力やチームワークを身につけ、地域社会の一員としての意識を形成していきたいと考えています。

その理由として、アルバックでは「成果主義」を否定し、日本的な雇用慣行（年功制や終身雇用など）を基盤にしています。最先端の技術を扱っているアルバックは、成功より失敗する確率のほうがはるかに高くなります。こういった環境では、失敗を恐れずにチャレンジ精神を維持することが難しくなります。そこでアルバックでは、年功制を基本とすることで、心理的な余裕を生み、積極的なチャレンジを促しています。また、給与にも大きな格差が出ないようになっていて、社内での過度な競争を抑え、全社一丸となったチームワーク力で、国内外の競合先を相手とするパワーの源泉としていきたいと考えています。

田んぼプロジェクトでは、安全確認と簡単な作業説明を行いますが、具体的に作業分担の指示をすることはありません。農作業においても、チームワークが重要で、体力のあるものが、体力の劣る女性や子どもたちの作業を補助し、効率的に作業が分担して行うということは、本来のものづくりの原点ともいえると考えています。

② 地域社会への貢献

茅ヶ崎市が抱える地域社会の問題として農業問題もひとつにあげられます。右記図１のデータが示すとおり、食糧自給率が２％と低く、農業従事者の平均年齢も58.2歳と高齢化している現状があります。これらの問題についても、企業が耕作放棄地を活用し、地域の

図１：茅ヶ崎市の農業　出典　茅ヶ崎市経済部　農業水産課調べ

茅ヶ崎市の食糧自給率(カロリーベース) ※全国平均 41%	2%
農地面積	315ha(田 53ha, 畑 262ha)
耕作放棄地	47.1 ha
農業従事者平均年齢	58.2 歳

産業促進と地域社会とのコミュニケーションの場となればと考えています。

③ からだと健康増進

働く人々は少なからずストレスを感じることがあると思います。残念ながら、アルバックの従業員にも業務が原因で心と体のバランスを崩す方います。そうした観点からも土などの自然に触れ作業することで、少しでもメンタルヘルスの効果、健康推進、精神的なリフレッシュに繋がればと考えています。また、稲作を田植えから収穫・脱穀まで行うことで食べ物に対してありがたさを感じてもらうと同時に、日本の伝統的な食文化に対する理解を深めるなどの「食育」の推進も考えています。

④ 環境への貢献

茅ヶ崎市というと、海を思い浮かべる方が多いと思います。それは、アルバックで働く従業員も同じことで、特に若い世代は県外の出身者も多く、本社・工場を置く茅ヶ崎市についてよく知らないというのが現状ですが、茅ヶ崎市の北部には丘陵地が残り、昔ながらの里山の風景が残されている貴重な地域があります。実際にお借りしている田んぼの周囲は、茅ヶ崎市版レッドデータリストにて絶滅危惧種（近い将来（10～20年後）に絶滅が心配される種。この中には、市内の１ヵ所しか確認されていないもの、個体数が極端に少ないもの等も含まれる。）であるタイコウチやアカテガニが生息している貴重な地域です。この田んぼプロジェクトが、そんな自然環境を維持し生態系を保全することの一助になればと考えています。また、その自然環境を利用して環境についても学ぶ機会を積極的に提供していこうと考えています。

３－２．2010年の活動

茅ヶ崎市行谷地区にて、10年ほど田んぼの作付けを実施していない、いわゆる休耕田271m²にてキヌヒカリの稲作を実施しました。社内外の参加希望者が集まり実施するイベントは、４回実施しました。詳細は下記のとおりです。

6月5日（土）　田植え　23名

7月17日（土）　自然観察会　20名

10月2日（土）　稲刈り　17名

11月20日（土）　収穫祭　25名

精米後の収穫量は、およそ120kgとなりました。その収穫したお米は、参加者に参加回数に応じて配分しました。また、12月16日には、社員食堂のB定食（鯖の薬味ソースかけ）にて、収穫したお米を提供することができました。

参加者を対象に実施したアンケートでは、「参加してどうでしたか」という問いに対して、「おもしろかった」と98％方が回答しているとおり（図２参照）、参加者からは、「子どもたちが参加して楽しそうでよかった」「重労働でしたが大自然の中で貴重な経験をすることが出来たので充実した一日でした」など日常生活から離れ茅ヶ崎の自然に触れるとともに、家族・同僚と過ごす時間を楽しんでいただいたと思っています。また、「田んぼで稲を育てる以外にやってみたいことがあるか」（複数回答可）という問いに対して、農園作業（畑で野菜を育てる等）60％、植林21％、次いでビオトープ作り７％、という結果になりました（図３参照）。

一方で、「今後の活動にも参加したいですか」という問いについての回答では、「参加したくない」という回答はなかったものの、「時間が合えば参加したい」が22％を占め、時間的な拘束があることがわかりました（図４参照）。

図２：参加してどうでしたか

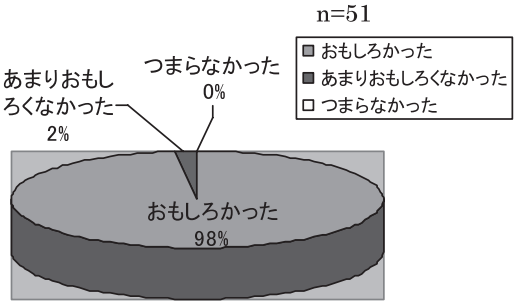


図３：田んぼで稲を育てる以外に何かやってみたいことがありますか

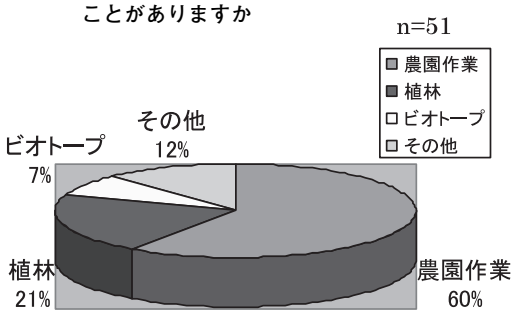
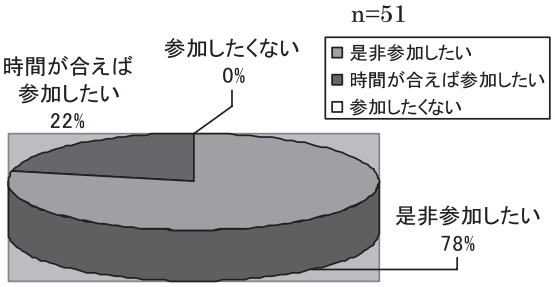


図４：今後の活動にも参加したいですか



３－３．2011年の活動

2010年の反省点から、継続した参加と、リーダー的な役割を担う参加者を育成するためには、飽きさせない工夫が必要であることから2011年の活動では、田んぼ271m²での稲作に加え、畑で野菜の栽培を行いました。また、年間スケジュールを2010年度の実績から作成し、活動日を事前に把握してもらえるよう工夫をしました。

2011年度、大きく活動が変わった点は、湘南総合研究所殿を中心にご協力をいただくとともに文教大学の学生の皆様にもご参加いただき、より地域に密着した活動となったことです。活動を通してよりアルバックを理解していただくため、６月25日（土）に文教大学の皆様に茅ヶ崎本社・工場にお越しいただき工場見学を実施しました。見学にお越しいただいた学生の方からは、「見たことのない装置や、アルバックが主にどういったことを行っているのかわかりとても面白かったです」「茅ヶ崎に本社のある企業が、海外にも進出していることを聞いて少し予想外でした」など感想をいただきました。また、図６のとおり、アルバックの印象が変わったという方が76％を占め、アルバックの企業活動について理解ただいけたのではないかと思っています。

図５：アルバックをご存知でしたか

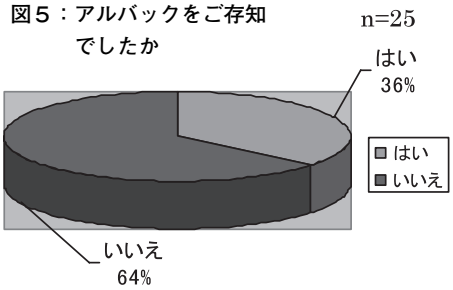
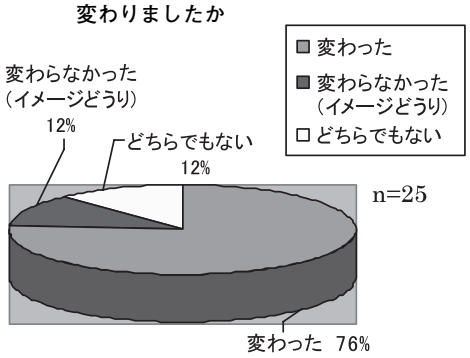


図６：工場見学をしてアルバックの印象が変わりましたか



文教大学の学生に向けての工場見学会

新たに実施した畑での農作物の栽培：落花生の収穫（左）、さつまいもの収穫

４．茅ヶ崎市内に見るアルバックの技術

アルバックグループは、

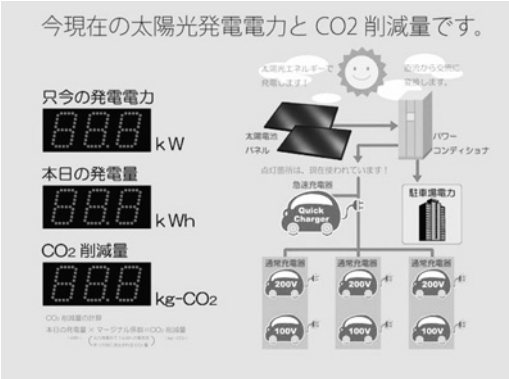
「地球環境の保全が人類共通の重要課題のひとつとしてとらえ、事業活動のあらゆる面で環境の保全に配慮し、住みよい地球と豊かな社会の発展に貢献します」

を環境理念に掲げ、持続可能な社会のために日々活動に取り組んでいます。特に、今回の震災に伴う原発事故により、世界的に脱原発に対する意識が高まり「省エネ」「創エネ」「蓄エネ」にかかわる技術が注目されています。ここでは、茅ヶ崎市内にみるアルバックの技術をご紹介します。これらの技術によって社会に貢献できたらと考えています。

４－１　太陽光発電・電気自動車急速充電システムの設置（市営駐車場）

2010年１月、太陽光発電設備と電気自動車（EV）向け急速充電器を組み合わせたシステムを製品化、市営「茅ヶ崎駐車場」向けの太陽光発電・急速充電システムとして初受注し、３月には設備の完成を祝して記念式典が執り行われました。

このシステムでは、駐車場の屋上に設置された発電能力20kWの太陽電池モジュールにて発電した電力が、電気自動車への充電に使用できるほか、充電に使用されていない時は、駐車場の照明として利用されます。また、発電した電力が余剰となった場合は電力会社に買い取ってもらえるシステムとなっています。これらの発電量などのデータは、駐車場入り口に設置された大型モニターのほか、無線LANでつながれた市役所本庁舎２階ロビーのモニターにも表示されているので、一般の方にもご覧いただくことができます（2010年３月時点）。



市営駐車場モニター画面

市営駐車場に設置された急速充電器　50kW

４－２　電動アシスト自転車用充電システム設置（茅ヶ崎市公園内野球場脇、鶴嶺西コミュニティーセンター）

2011年３月、小型風力と太陽光発電設備を組み合わせた電動アシスト自転車バッテリー用充電システムを茅ヶ崎市公園内野球場脇、鶴嶺西コミュニティーセンターに設置しました。このシステムは、駐輪場屋根の太陽電池に加え、風力による発電ができ、二次電池（リチウムイオン電池）による蓄電が可能なため、クリーンな自然エネルギーのみを使用しているのが特長で、24時間充電が可能です。また、同時に５台、１日あたり10台分の電動アシスト自転車のバッテリーを充電することができます。さらに、蓄電池に蓄えられた電気を災害時の緊急用電源として使用することもできます。

茅ヶ崎市公園内野球場脇に設置された充電システム

５．防災体制の強化と地域との関わり

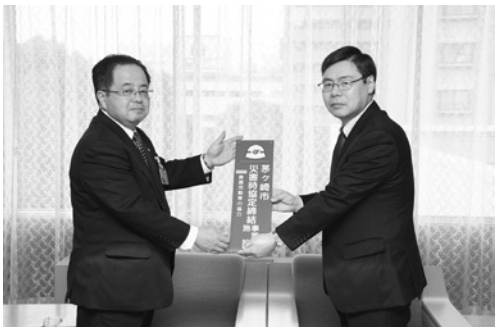
アルバックは、これまで「地震」と「火災」を想定した防災体制を敷いていましたが、東日本大震災の教訓を活かし、「津波」に対する対応の見直しを行いました。ただし、茅ヶ崎本社・工場においては、津波の被害は想定しがたく、むしろ相模川の洪水に重きを置いた内容となっています。

150年に一度の大雨による相模川の氾濫での被害を最小現にとどめる対策として、建物内の開発装置の浸水を未然に防ぐという堅実な策を実施します。また、避難訓練もこれまでとは大幅に変わり、屋外への避難だけでなく、洪水を想定した２階以上への避難と点呼、安否確認に重点が置かれました。

特に今回の東日本大震災のような大規模災害時には、行政のみの態勢で対応することには限度があります。そうした中、アルバックは、市民を災害等から保護し、災害等の拡大防止と被害の軽減に努めるため、災害時協定を締結しました。

協定事項しては、①避難者収容のための設置場所の提供、②防災行政用無線の設置場所の提供、③防災備蓄資機材の搬送、輸送及びそれに伴う人員の派遣、⑤災害時に使用する機材等の提供、⑥災害復旧活動に係る人員の提供、⑦街頭消火器の設置場所の提供の７つの協力事項が盛り込まれています。

また、すでに茅ヶ崎市防災協対策課と防災用無線の設置の他、東日本大震災の経験を活かし、さらなる準備を進めていきます。



災害時協定調印式
服部市長（左）とアルバック　取締役　本吉

６．今後の課題

社会には様々な問題（雇用、人権、自然環境問題、食糧問題の深刻化）があり、複雑に関係しあっています。特に、急速な経済のグローバル化にともない、1990年代以降のバブル崩壊後、企業の影響力が大きくなると同時に企業の不祥事が多発しました。結果、企業は社会からの信頼を失い、改めて社会的責任の大切さを認識しました。このような背景から企業価値の評価基準は、財務パフォーマン

スだけでなく「社会」や「環境」に関する活動実績からも評価する「トリプルボトムライン」という考え方が定着してきています。さらには、企業の周りを取り巻く環境は、日々刻々と変化しています。その変化に柔軟に対処し、社会の様々な問題を解決するためには、企業だけでなく、市民とともに問題を解決するという姿勢、CSR（Citizens' and Corporate Social Responsibility）社会的責任を果たしていくことが必要という考え方に移行しつつあります。またより一層、企業に関わるステークホルダーの皆様の声を聞き、問題を解決していくことが企業価値の向上に繋がるのではないかと考えています。

企業にとって、日々の生産活動の中では地域社会との関わりを意識することが少ないため、「田んぼプロジェクト」などの活動をより有効で継続的なものにするためには多くの課題を抱えています。例えば、将来的にどのような活動に発展させ、地域にどのような成果をもたらすことができるのか、参加者に対しての喜びや楽しみを重視できているのか、など。アルバックには、海岸清掃や、田んぼプロジェクト、湘南ベルマーレとのCSRパートナーと活動を行うなど多くの社会貢献活動があります。将来的には、従業員が自身のライフスタイルに合わせた無理のない活動を自ら考え、自発的に活動できるような仕組みづくりを模索し、グループ会社にも展開していきたいと思います。

謝辞：「アルバック田んぼプロジェクト」には、湘南総合研究所殿をはじめ文教大学の学生の皆様、茅ヶ崎市役所のご協力を得て活動しています。そして農作業の指導に当たってくださる野中和幸氏をはじめ多くの方々に、感謝いたします。